

学校間格差下の生活と教育課程 (2)

——山形県村山地区の調査研究——

横 山 敏

1. はじめに
2. 高校教育「普遍化」の歴史的意義
 - (1) <大衆社会の大衆学校>
 - (2) 学校差・学力差顕在化の意味
 - (3) 高校教育の現実と可能性
3. 山形県村山地区における学校間格差の形成過程
 - (1) 山形県村山地区における高校教育普及の意義
 - (2) 学校間格差形成の諸要因
 - (3) 学校間格差の現状
4. 学校間格差下の高校生の生活
 - (1) 分析視角（以上第16集）
 - (2) 学校生活の格差とその制約（以下第17集）

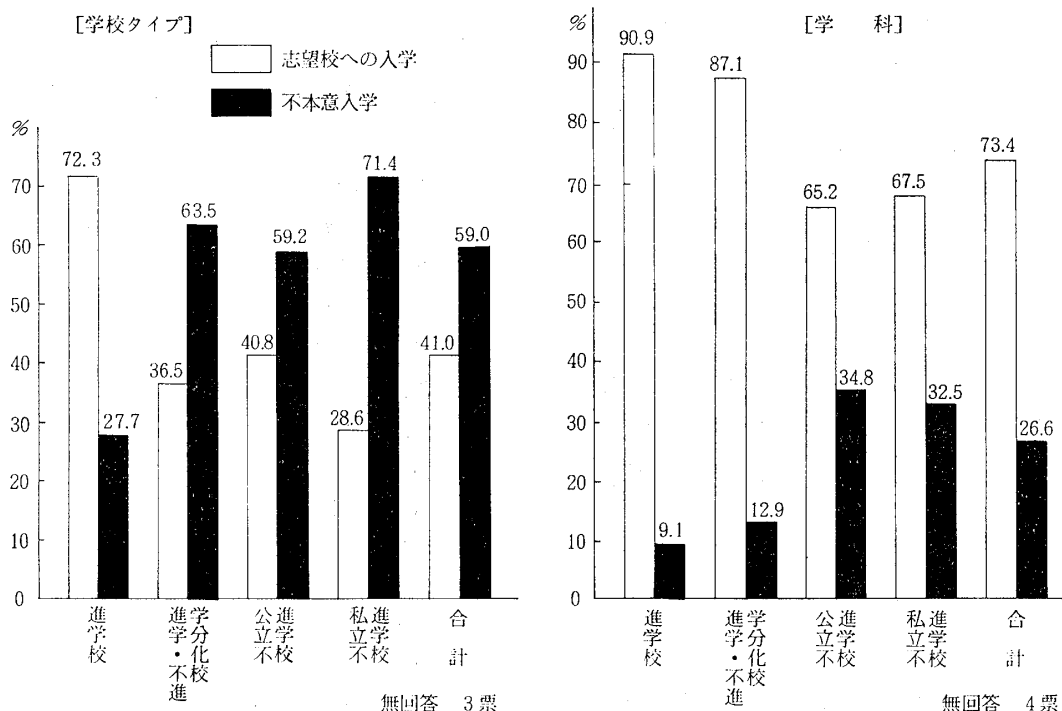
- (3) 高校生の生活時間と仲間関係
- (4) 教育をめぐる家族関係の葛藤

4. 学校間格差下の高校生の生活（承前）

(2) 学校生活の格差とその制約

偏差値によって進学する高校を振り分けられ、入学した学校に基だしい学校間格差があるために、多数の生徒たちの高校への入学が「不本意」なものとなっている。かれらは、高校への入学を「当然」と考えながらも、自らの進学した学校への入学についてはかなりの数の生徒たちが「不本意」と感じているのである。

私たちの調査した東根市立中学校出身の高校3年生の場合、図5のとおり、60%に近い生徒



注) 図中の数字は、各学校タイプ内の回答した生徒全体に占める%を示す。

図5 志望校への入学、不本意入学

が入学した高校について不本意であると回答していた。その数は、進学・不進学分化校で64％、私立の不進学校で71％と高かった。進学・不進学分化校の生徒は進学校との対比で、私立の不進学校の生徒は公立校との対比で、自らの就学する学校に負のイメージをもち、自らの就学する学校への入学を「不本意」と感じてきたのであろう。進学した学校の学科について、生徒は全体として肯定的にとらえているのであるが、進学した学科へのこの肯定的な態度と学校への否定的な態度との間には少なからぬずれがある。進学した高校の社会的威信の低さは、進学した学科の教育内容への関心を圧倒して、生徒たちの学習意欲を著しく阻害していると思われる。ところが進学校の場合、希望した高校に入学したという生徒が72％におよび、希望した学科に入学したという生徒が91％に達している

（進学校内部に威信の差があって不本意入学者数は学校ごとにより異なっている）。おおくの進学校の生徒は、学校の社会的威信、大学進学への有利性、普通科における進学向けの教育に価値をみだし、一定の満足感を享受している、とみられる。こうした学校間格差による劣等感、さらに各学校における同質の生徒の集中のなかでの競争による劣等感へのその後における対処のいかんは、高校生の生活全体に深刻な影響をおよぼすことになる。

入学後の学校生活のなかで生徒たちは学校生活をいかに享受しているか、その点を検討しよう。まず、学校生活の「楽しさ」について見るなら、享受しているところがあるという生徒が74％強であるのに対して、享受するところが少しもないという生徒が25％におよんでいる（図6）。楽しさを享受している生徒は、進学校89％、公立不進学校77％と高いが、進学・不進学分化校、私立不進学校では楽しさがないと回答した生徒がかなりいる（前者が31％、後者が36％）。

以上の資料から希望して入学した学校か否かに関する傾向と学校生活を享受しているか否かに関する傾向が一致していること、希望しない

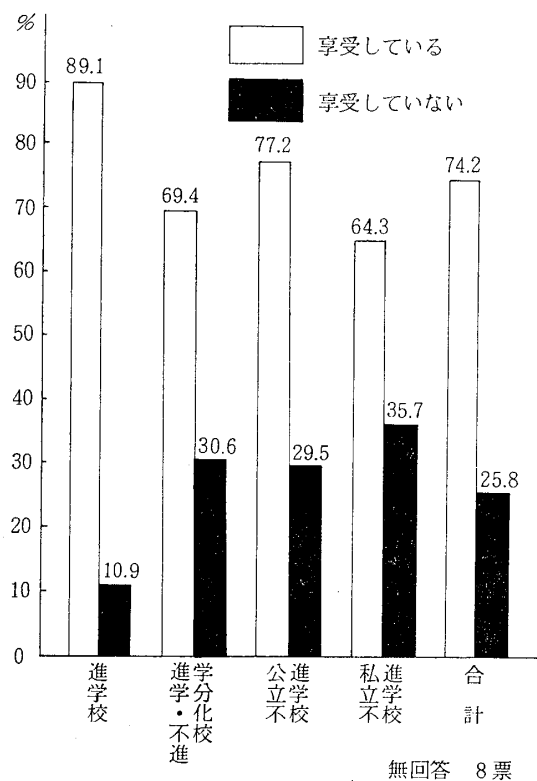


図6 学校生活の享受

学校への入学が生徒の学校生活を覆い、その活気を阻害していることがわかる。

次にみる不本意入学者の事例はそのことを端的にものがたっている。

〔O高校普通科Aコース Tさんのばあい〕

Tさんは、農家の3人兄弟の次女である。家は専業農家であり、水稲が2.3ヘクタール、果樹が1.5ヘクタールであり、経営規模が大きい。そのため労働力が不足し、近くの水稲だけの農家の主婦を臨時雇で雇っているほどである。家計の点では、農家としては比較的恵まれているといえよう。しかし、家族生活に困難がないわけではない。まず、果樹栽培と水稲の複合経営であるため、両親ともに年間の農作業がきれめなく続き、あまりに忙がしい。そうした状態の中でも、両親は子どものしつけについてはかなり厳しく対応しており、手伝いについても家事と農作業をさせている。子どもの教育についても、親は相当に気を配っている。Tさんの成長のために、夫婦間でも、親子間でもよく話し合ってきたものと思われる。本人は、「小さい時から、よく手伝ってきた」といっているけれども、親からみると

「クラブや通学時間のためほとんど手伝いはできない」ということになる。それほどこの規模の農家は農作業が忙しいのである。また、5年前に家屋を全焼し、家を建て替えなくてはならないという重圧もあった。

Tさんは、はばひろい友だちづき合いに楽しさを感じ、クラブ活動にも熱心に参加してきた。各教科目の学習についても、就職が希望する県内でなかなか困難であると知り、学習に励んで以来、校内で上位の成績をおさめるようになっている。しかし、他方では、次のような事実がある。「TO高校やH工業高校に入学できればよかったが、進学できなかった。お母さんが忙しいからM農高にすすむのはいやだといわれた」(母親)。「中学時代は、成績が中ほどでTD高校を志望したが、O高校に入学することになった。学校の友だちづき合いは楽しいけれど、授業時間とか、進路を考えるといやになる。勉強する上での励みは、成績が上がって先生にほめられるときだけでも、その勉強が何に役立つのか疑問だ。学校の雰囲気は、決してよいとはいえない。男子は、授業をさぼったり、遅刻、早退をしたり、タバコをすったり、ツッパリの傾向にある。服装にしまりがなく、髪の毛をパーマしたりしている。私たちの学年は生徒数が150名くらいいるが、男女あわせてそのような生徒が40人位いる。周囲の影響があったり、家庭がくずれたりしてそうなっている生徒が多い。教科書は学校に置いたままにし、カバンを持たないで通学するのがあたりまえの姿になっている。みんな中学時代からだめな学校だと感

じてきたし、自分たちでだめだと思ってしまう。私は早くこの学校を卒業したい。この学校にすることがつらい」(Tさん)。

この生徒の場合、学校での生活を享受している方であるが、不本意入学の上に入学した高校における周囲の生徒の生活態度への嫌悪感、学習以前の段階での停滞、学力の効用への疑問がおりかさなっていた。

学校生活のなかで生徒がその生活を享受していることがらの内容は、一様に「友人づき合い」、「学校行事」が多く、さらに「クラブ活動」がそれに続いている。「授業」、「ホーム・ルーム」、「生徒会活動」については、それらを享受していない生徒が圧倒的であることが知られる(表6)。すなわち、教師の指導が介在するこれらの活動に意欲をもちえない生徒がかなりの拡がりを示している。これら、学校生活のなかで生徒が意欲をもつことのできないことの多い項目に限らず、多数の生徒が楽しいと回答している友人づき合い、学校行事等についても、その楽しさへのたちいった検討が必要とされるであろう。そのさい、高校入学時の選抜、高校教育それ自体の選抜過程への変容が生徒の意欲そのものを深くとらえ、学校生活の享受に深刻な影響をおよぼしているのであるから、そのような事実との関連において学校生活を分析することが不可欠とされよう。

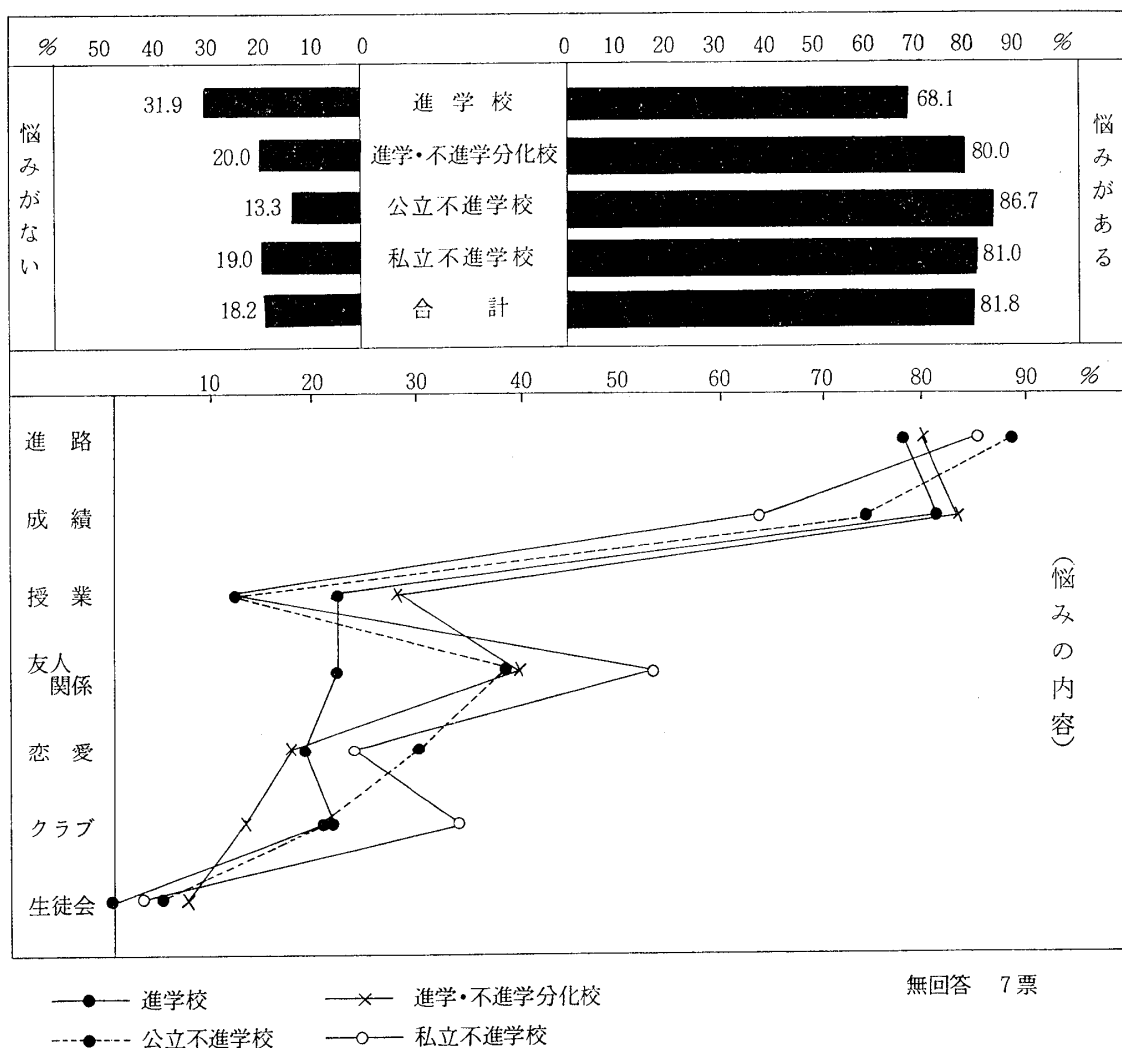
それでは、生徒は学校生活にどのような悩み

表6 学校生活の享受、その内容

	友だち づきあい	学校行事	ク ラ ブ 活 動	授 業	生 徒 会 活 動	ホ ー ム ・ ル ー ム
進 学 校	39 (95.1)	34 (82.9)	17 (41.5)	3 (7.3)	1 (2.4)	1 (2.4)
進学・不進 学分化校	56 (94.9)	40 (67.8)	23 (39.0)	12 (20.3)	6 (10.2)	4 (6.8)
公立 不進学校	133 (95.7)	111 (79.9)	62 (44.6)	10 (7.2)	16 (11.5)	10 (7.2)
私立 不進学校	49 (90.7)	42 (77.8)	22 (40.7)	3 (5.6)	1 (1.9)	2 (3.7)
合 計	277 (94.5)	227 (77.4)	124 (42.3)	28 (9.6)	24 (8.2)	17 (5.8)

注) 無回答 図6で「享受している」と回答したうちの1票。

() 内の数字は、享受している生徒全体に占める%を示す。



注) 下段の図は、悩みがあると回答した、各学校タイプ内の生徒全体に占める比率を示す。

図7 学校生活における悩み、その内容

を懐いているだろうか。学校生活に悩みがあると回答した生徒は82%におよび、学校別でみると悩みがあるという生徒は不進学校で多く、進学校で少ない(図7)。むしろ、発達段階のみとりだして論ずるとすれば、青年期としての高校生段階に悩みがあるのは知的成熟と自我の発見にとって自然の状態であるといえることができる。だが、こんにちにおける学校生活場面での悩みは、彼らの社会生活から切り離された悩みとしてそれを抽出することを許さないだろう。

すなわち、生徒の悩みに学校間格差が端的に表わされ、しかも悩みの内容が学校毎に明瞭に異なっている。どの学校でも進路と成績に関する悩みが圧倒的であるが、それらの悩みの性格が大へんに分化しているのである。図7に見る

ように成績をめぐる悩みは、やや進学・不進学校分化校で高く、不進学校では低くなっている。逆に進路をめぐる悩みは、やや不進学校で高く、進学校、進学・不進学校分化校で相対的に低くなっている。不進学校で進路をめぐる悩みが高いのは、あきらかに就職をめぐる悩みがリアルであることによるものであろう。友人関係やクラブ活動上の悩みは概ね不進学校で高くなっているが、進学校ではあまり高くない。このように、学校毎に生徒の関心が分化するに応じて悩みも相当に分化しているといえよう。

高校生の悩みについて、かれらの学習に焦点を絞っても、多くの高校生が動揺と不安に直面していることがわかる。学校毎にみると、進学校で学習上の不安が圧倒的に高く、不進学校では

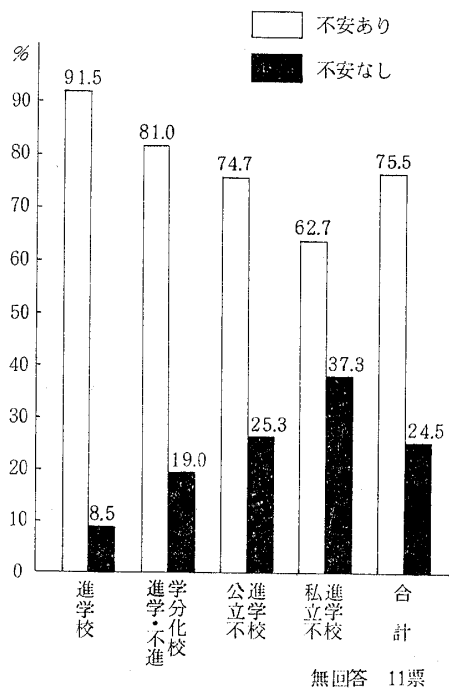
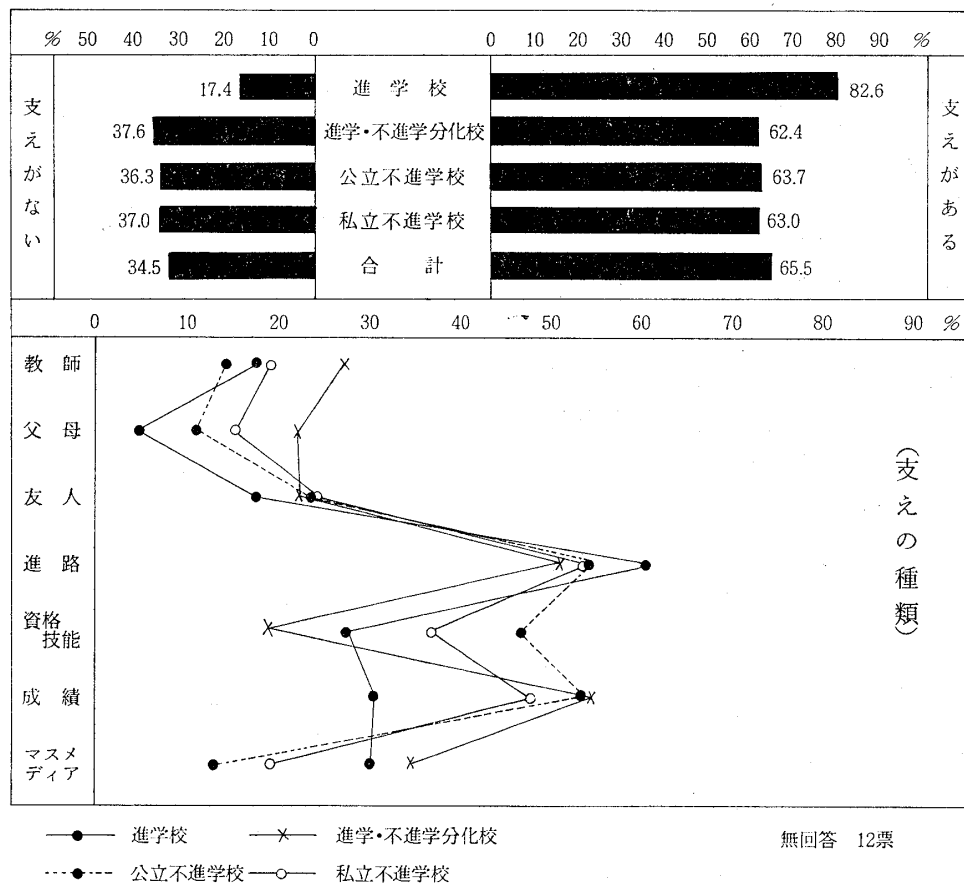


図8 学習における不安

学習上の不安がかなり低い。進学校の生徒の場合、学習における不安を懐く生徒は92%にもおよんでいる(図8)。進学校の生徒の場合、成績と成績によって達成される学校歴だけが学習上の目標となっている現状の下で、過剰の競争下において不安や劣等感を持ちやすいこと、単一の偏差値尺度下の序列に呑み込まれていることが予想される。偏差値尺度の枠内では優越者は限られているのだから、その解決は困難となる³⁰⁾。

かくして、就職にせよ、成績にせよ、学校生活における悩みは、その内容のちがいににもかかわらず、進学校から不進学校にいたるまで圧倒的多数の生徒をまき込んでいる、ということができよう。

高校生の学習は、その学習に対する激励や支持によって可能とされる。学習にたいする社会的な承認、社会的な保障が必要とされる。図9



注) 下段の図は、支えがあると回答した、各学校タイプ内の生徒全体に占める比率を示す。

図9 学習に対する支持

は、生徒の学習に対する支持を、支えとなっている人びと（教師・親・友人）および支えとなっている事柄（進路・資格技能・成績等）についてみたものである。学習に対する励ましがあ
り、支持があると回答した生徒は65.5%，ないと回答した生徒は34.5%であった。これを学校毎にみると、進学校においてのみ学習に対する支持があるという生徒が83%を占めていて圧倒的に高く、他の学校では学習上の支持があるという生徒が60%強であった。進学校以外の学校では学習上の支えがないという生徒が36%以上もいる。学習を支える人びとについてこれを見るなら、ぜんたいとしてそれを支える社会的関係が弱いことが知られる（進学・不進学分化校における教師の指導、私立不進学校における教師・親・友人との関係等にやや支持の高さがみられるが）。進学校では自らのみぎす進路が学習の支えとなっているという生徒が多いが、現在の学業成績が学習の励みとなっているという生徒は極く少数にすぎない。じっさいには、学校内の競争と成績序列の下で進学校の生徒が殊に劣等感をもちやすく、それとうらはらに将来の学校歴だけが唯一の学習の目標となりがちであることが示されている。じっさいの学業成績に不安を懐きつつ、威信の高い高等教育機関をめぎすジレンマのなかに進学校の生徒が立たされている、といえよう。

進学校の生徒としては、学習を励まし支える人びとが豊富にいて、大学進学のための比較はつきりしている生徒の事例を見よう。

〔W高校国立文系コース Kさんのばあい〕

Kさんは、先生や両親に支えられたとき、自分の進路にとって学習が必要だと感じたとき、成績が上がったとき、学習の大きな励みとなっていると回答していた。両親はともに市役所に勤務する地方公務員で、父親は市の管理職である。所得も相当に高く、家計上不安はまったくない。市史の編集室課長を務めているために職務に多忙であるが、父親はKさんの相談にはよくのって、結論をいそがず、話をじっくり聞き、その上で方針上のアドバイスをしている、という。Kさんは、国立大学教育学部を志望し、そののち教師になりたい

と考えている。地元の大学か東京の大学かをめぐって親子の間に意見のくいちがいがあるが、その他には親子の間に対立はほとんどなく、Kさんに家族生活上深刻といえる悩みはいまのところみあたらない。クラブ活動は、合唱部に属していたが、「2年生の後半に部活と勉強との両立に悩み、最近そこから抜け出したようだ」（クラス担任）。調査時点で「いま部活にはほとんど参加していない」（Kさん）。「その結果、成績は上位に入っている」（母親）という。W高校は、「受験準備教育に徹底して欲しい。学校全体がのんびりしており、E高校にくらべると手ぬるい感じがする」（母親）とのこと。家庭では家事手伝いはほとんどさせず、進学準備の学習を保障するようにし、「教科のうち数学の成績がよくないので家庭教師をつけている」（母親）。

「学校の生活は楽しい。中学時代にはブラスバンド部に入っていたので部の友人が多かったが、今は中学時代につき合いのなかった友だちでも汽車通同志で友人になっている。また、学校の内部でも気の合う友だちがいるが、成績のことについてはおたがいにぼかしてしまう。クラス担任の先生（社会科）は、わかる授業をしてくれる先生で、この先生のアドバイスが大きな励みになっている」（Kさん）。

教師、両親との関係や現在の学業成績が励みとなっている比較的めぐまれた条件のもとで学習している生徒の例であるが、それらの関係や成績じたいのなかにも歪みが伴っている（母親は、「高校で教養を子どもに身につけさせていくことは必要ではない。とにかく進学の準備が必要だ」と語っていた。Kさんも友だちとの間では学力に関する「成績のことについてはぼかしてしまう」のである）。そのことをこの事例のなかから知ることができよう。

進学校以外の学校でも将来の進路が学習の励みとなっている生徒が多いが、進学・不進学分化校、公立不進学校となるにしたがって学習上の支えがある生徒のなかで成績が上昇することが励みとなっている生徒の比率が高くなっている。公立不進学校ではこうした学習上の励みの上に、資格や技能の獲得が学習の励みとなっているという生徒が多い。私立の不進学校では、

資格、成績、進路がはげみとなるという生徒は少なく、友人、教師、両親の励ましが学習の支えとなっている生徒の比率がやや高くなっている。このように、私立不進学校のばあい、他の学校の生徒たちの学習上の励みとは異なった回答となっていた（私立高校における近年の顕著な教育実践の発展、私立不進学校における女子生徒の比重の高さ、普通科生徒の比重の高さ、政策の結果として人びとによって底辺校として意識され、入学時より生徒の学業成績水準が高くなかったこと等、別に考慮しなければならぬ要因が多い）。

進学・不進学分化校や公立不進学校では、学習の支えとしての励ましが何もないという生徒が進学校より多く、したがって学習に困難をかかえる生徒が多いのであるが、他方では学習の支持がある生徒たちのなかに進路（自らが将来従事する職業を中心とする社会生活）への期待、さらに公立不進学校では資格・技能の獲得による励みのように、学習への支えが複合的で、やや厚みのある生徒もまたかなりいるように思われる。そこで、学校の威信における階続や劣等感の存在にもかかわらず、むしろそれがあるがゆえにかえって2年余の高校生活のなかで自ら学習の支えとなる拠点の確保を求め、そのための謂わば「悪戦苦闘」をつみかさねてきた生徒の事例を見よう。

〔H工業高校電気科 A君のばあい〕

A君の家族構成は、両親と他出した姉、そして本人の4人である。両親は農業に従事しているが、父親が強度の弱視であるため農作業をはじめ生活全体に困難が伴い、家族の将来が不安であると、A君はいていた。父親は明るい時でさえ、あまり物が見えないという。

「中学時代に勉強は人並に頑張ったけれども、志望する学校をY工業高校からH工業高校に変えなくてはならなかった。本当に不本意ではじめはショックが大きかった」（A君）。A君は、1年生のとき「いたずら」（喫煙、バイクの無免許運転等）が原因でクラス担任（電気科）の注意を受けた生徒である。友人といっしょになるとこうした行動に出ることがあったという。しかし、2年生

の終りころから教師の指導もあって、自分かつてな行動を抑制することができるようになり、他人にたいする接し方、話し方も大分改善され、こうした行動をとることはまったくなくなった。なお「周囲の生徒をまとめるだけの包容力や説得力に欠ける」（学級担任教師）とのことであるが。

「学習の面でも、その後、学校のなかで3本の指に入るつもりで頑張った。いま成績は上位だがまだまだ自分の学力に満足がいけない。成績の上昇は、大きな励みになってきた。大学には進学できれば進学したいが、そのための勉強はしてこなかった。だから就職することになっている。就職試験までになんとか頑張ってもっと学力がつくようにしたいものだ。志望している就職先は自分のもっている資格が生かせるところではないが、在校中にもう一つ資格をとりたいと考えている。クラブも硬式テニス部で一生懸命にやってきたけれども、インターハイに出場できなかったことは残念だ。クラブ活動をやっているからといって勉強できないなどということはなかった」（A君）。

A君の資格取得にむけての努力、学業成績の上昇に対して教師の指導は、彼が「専門の先生から励ましを受けてきた」というとおり、あずかって大きな力があつた。しかし、そのA君も「普通科目については疑問も多い。例えば数学は、加減乗除とかんたんな計算ができれば社会に出て働いたり、生活したりすることができる。もっと選択科目をふやした方がよい」といっている。

ここに技能と資格取得を求め、しかも教師の指導を自ら求めた生徒の激しい苦闘を私たちはみいだすことができる。しかもなお、社会生活から切断された教養に対する嫌悪感がこの生徒の例にも伴っていた³¹⁾。

(3) 高校生の生活時間と仲間関係

学校間格差の下での高校生の生活の差異は、かれらの学校内部での生活にのみあらわされているわけではない。かれらの学校外での生活様式にも決定的な影響をおよぼしていると思われる。そこで、高校生の学校外での生活様式を、かれらの生活時間の活用のしかた、友人との仲間関係に焦点をあわせることにより検討しよう。

自由な時間をいかに活用するかという問題は、青年期における個々の能力を内にふくむ人

格の形成、自らの価値意識の形成にとって一つの基本指標たりうるであろう。私たちは、高校生の日あたりの自由時間の過ごし方について、(1)テレビ視聴、(2)勉強、(3)学習塾・予備校・家庭教師の下での学習、(4)部活動、(5)生徒会活動、(6)友人との遊び、(7)家族との団欒を主な項目として調査した。その結果、(3)学習塾・予備校・家庭教師の下での学習はほとんどネグリジブルであり、(7)家族との団欒については学校のいかにかわりなく、かなり平準化している、等が明らかとなった。そこで、ここでは(2)勉強、(6)友人との遊びの時間に絞って（＜学習時間軸＞と＜友人との遊びの時間軸＞について）見ていくことにする。

生徒の校外での生活時間のなかで、その時間の活用が最も明瞭に分化するのは、図10に示し

進学分化校の生徒は、学習時間1時間以下の生徒をほぼ21%程度ふくみながらも、約54%の生徒が2時間以上の学習時間を確保し、そのうち3時間以上学習する生徒は約28%となっている。この調査では中学生段階の学習時間との比較をおこなっていないが、中学生段階で1～2時間の学習時間への集中という結果を示した別の地域の別の調査結果と比較すれば、中学生段階から高校生段階にかけて大幅な学習時間の分化がいきよにすすんだものと推測される³²⁾。

それに対して、友人との遊び時間をみるなら、さきの学習時間とはほぼ逆の関係となっている。不進学校では、友人との遊びの時間が2時間を超える生徒が私立の場合全生徒の約30%を占めている。これらの学校では、遊び時間のピークをなすのが1～2時間であって、その比率

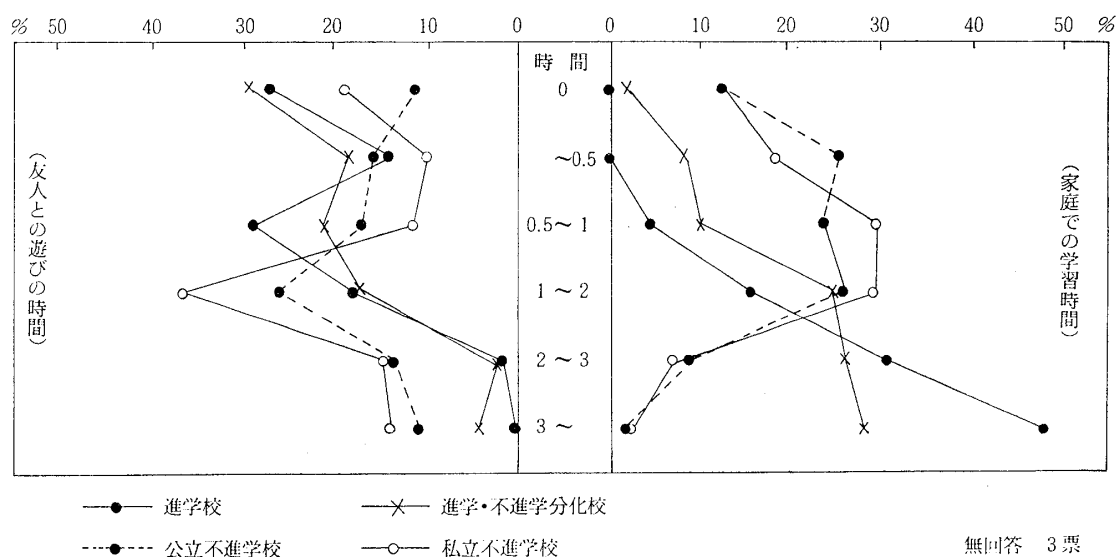


図10 学習時間・友人との遊び時間

た学習時間である。公立不進学校では、ある程度おちついて机に向うことができる2間時以上の学習をおこなっている生徒は、わずか10%程度であるにすぎない。しかも、全然学習しないか、1時間以下程度の学習をする生徒が62.5%を占めている（私立不進学校でもほぼ同様の傾向を示している）。それと対照的に進学校では約80%の生徒が2時間以上の学習時間を確保している。しかも、約50%程度の生徒が3時間以上の課外の学習時間を確保している。進学・不

は私立不進学校で約37%、公立不進学校で約27%である。とはいえ、私立不進学校の場合、友人と遊ぶ時間の長短にかなりの分化傾向がある。進学校および進学・不進学分化校では、日常的にまったく友人と遊ばない生徒と遊ぶ時間が30分以下の生徒を合計すると、進学校で約29%、進学・不進学分化校で約21%となっている。ただ、進学・不進学分化校では、3時間以上遊ぶという生徒が5%程度と進学校よりも高く、この学校のタイプのなかで友人との遊びの

時間に分化がみられる。

学習時間軸の極限には、生徒の分化のなかで「ほとんど全くといってよいほど学習しない生徒」と自由時間のほとんどを「学習だけに使用する生徒」の大量の存在があるとみられる。同様に、友人との遊び時間軸からみれば、その極限には、「全く遊ばない生徒」と昼間から夜にかけて「主要な生活時間のほとんどを友人との遊びにつかう生徒」が大量に存在する。この二つの軸による生徒の分化がそのままはなはだしい学校差の表現そのものとなっている。また、中学生—高校生—社会人あるいは大学生という時系列にそった変化を予想すれば、とりわけ2つの軸の極限に位置する生徒に安定性のある生活をみいだすことは困難であろう。

図11は生徒の進路希望別の友人との遊び時間を示す。就職—私立大学—短期大学—国公立大学の希望者順に、後者になればなるほど遊びの時間が短くなり、前者であるほどそれが長時間化している。以上の事実を、高校における生徒

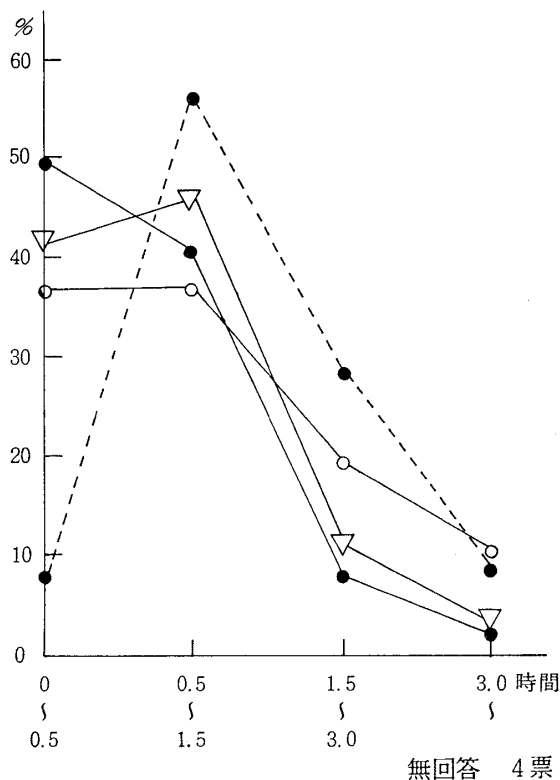


図11 希望する進路×友人との遊び時間

の選抜が、一方では仲間づきあいのための生活時間に制限を加え、他方ではいたずらな学習への背反と遊びの長時間化を促していることを示している。それゆえに選抜・競争こそ時間の自由な活用に対する制約条件となっている、といつてよい。

友人との仲間関係は、生活時間の活用状況の一つの内容をなす。そこで、友人との仲間関係の質について考えよう。高校生段階での友人の数は、進学校、進学・不進学分化校、不進学校のいずれをとってもほとんどちがいがみられない。「友人」という言葉に対するイメージによつてもその範囲が著しく異なつてこようが、ともかく高校生段階では11人以上友だちがいて回答した生徒が過半数を占めていた(回答者全体の57%でいど)。中学生段階からの推移でみるなら、中学生段階よりも友人が減少したという生徒が少なく(11%でいど)、中学生段階より増加した生徒は21%でいどであった。ぜんたいとして、中学生段階と友人の数が変わっていない生徒が多く(68%でいど)、多くのばあい友人数にさしたる変化はないといつてよい(表7)。

同一高校の友人か、他校の友人かを見るなら自分の通学する学校内にのみ友人がいるという生徒が34%を占め、自分の学校にも他校にも友人がいるという生徒は64%でいどを占めている。他校にのみ友人を求め、他校にのみ仲間がいるという生徒はほんの少数の例外的存在にすぎない(表8)。(すくなくとも国際的な視野からみれば、)ひろく学校外に友人がいることは例外的なことではない。しかし、日本の高校にかんする常識の枠内では、自ら就学する学校がおのこのの高校生の生活の拠点であるかぎり、学校内の友人が主な仲間であるということはある意味において当然の結果である。しかも、この当然の結果が重要な意味をもっている。日本の高校には学校間格差があるからである。わけても、私たちの調査した東根市の生徒の就学する高校は、全国で最も広域の学区である「村山・最上学区」のなかにあり、そのゆえに各高校の生徒集団は学業成績面で内部的には同質の、高

表7 友人数の変化—中学校から高校へ—

		中 学 段 階 で の 友 人 数					
		0～1人	2～3人	4～5人	6～10人	11～ 人	計
高 校 段 階 で の 友 人 数	0～1人	1 (20.0)	1 (20.0)	—	1 (20.0)	2 (40.0)	5 (1.3)
	2～3人	1 (3.8)	14 (53.8)	8 (30.8)	2 (7.7)	1 (3.8)	26 (6.6)
	4～5人	—	6 (14.6)	17 (41.5)	14 (34.1)	4 (9.8)	41 (10.5)
	6～10人	—	7 (7.2)	29 (29.9)	50 (51.5)	11 (11.3)	97 (24.8)
	11～ 人	—	4 (1.8)	10 (4.5)	25 (11.3)	183 (82.4)	222 (56.8)
	計	2 (0.5)	32 (8.2)	64 (16.4)	92 (23.5)	201 (51.4)	391 (100.0)

注) 無回答36票。

表内の下段の数字は、例えば高校段階0～1人の友人数をもつ者全体に占めるパーセントを示す。
計下段の数字は、全生徒に占めるパーセントを示す。

表8 学 校 内 外 の 友 人

	学 校 内	学 校 外	学校内外	N R	合 計
進学校	14 (29.2)	—	33 (68.8)	1 (2.1)	48 (100.0)
進学・不進学 分化校	28 (26.4)	3 (2.8)	75 (70.8)	—	106 (100.0)
公立不進学校	77 (41.2)	—	110 (58.8)	—	187 (100.0)
私立不進学校	26 (30.2)	5 (5.8)	54 (62.8)	1 (1.2)	86 (100.0)
合 計	145 (34.0)	8 (1.9)	272 (63.7)	2 (0.5)	427 (100.0)

注) 「学校内」とは「私」が就学する学校内のみ友人がいると回答した生徒数を示す。

() 内は各学校タイプの生徒全体に占める%を示す。

校間ではかなり相互に異質の生徒集団になっている。そのてんが「できる子」も「できない子」もいる中学校の生徒集団などとは顕著に異なるのである。したがって、学校内部に友人関係の比重があり、その内部に仲間関係の枠が限定され、すでに入学時点で学業成績によって各学校にふりわけられているかぎり、高校生の仲間関係はすくなくとも学業成績のてんでは似かよった仲間どおしの関係とならざるをえない。たしかに、高校生段階で成績のいかにかわ

くなく友だちと交際している生徒はすくなくない。私たちの調査でも中学生段階で学業成績面でかなりちがった水準の生徒が友だちであったという生徒が圧倒的に多く、全生徒の67.5%を占めていた(表9)。他の調査によるなら小中学校段階においてさえ成績毎の仲間集団へと編成替えが進んだとの指摘がなされているが、この調査結果ではなお成績にかかわりなく仲間集団をもつ生徒が多かった。そして、高校生段階でも学業成績とかかわりなく異なったレベルの

表9 「私」と「友人」の学業成績

	中同レベル 高同レベル	中同レベル 高異レベル	中異レベル 高同レベル	中異レベル 高異レベル	合 計
進学校	3 (6.3)	4 (8.3)	13 (27.1)	25 (52.1)	45 (100.0)
進学・不進学 分化校	18 (20.7)	11 (12.6)	15 (17.2)	41 (47.1)	85 (100.0)
公立不進学校	48 (26.1)	19 (10.3)	34 (18.5)	80 (43.5)	181 (100.0)
私立不進学校	16 (19.0)	5 (6.0)	22 (26.2)	36 (42.9)	79 (100.0)
合 計	85 (21.1)	39 (9.7)	84 (20.8)	84 (20.8)	390 (100.0)

注) 無回答37票。

「中同レベル」とは中学校段階で「私」と「友人」の成績が同じレベルであったことを示す。

成績の生徒を友人にもつ生徒は56.4%を占めていたのであるが、甚だしい学校差のあるなかではその意味はうすれざるをえない。

しかも、高校が選抜と配分をおこなう機関としての性格に覆われているなかでは、同一学校内部でも生徒間に排他的な競争意識が強まり、相互の信頼や連帯を育くむことさえ困難になってくる。そうした傾向は、進学校の生徒においてより顕著であった。山形県随一の進学校の一生徒とその父親は、私たちの聞きとりに対して次のように回答していた。

〔E高校普通科理科系コース O君のばあい〕

O君の成績は、E高校の生徒のなかでほぼ中位にある。「学習上わからないところがあると友人のなかに成績のよい人が多いのでかれらに聞く。プロの数学雑誌を読んでいる友人もいる。職員室には一種の雰囲気があるから聞きにいかない。私はすぐ趣味にこる方だが、友人の間ではマージャン、花札、トランプなどをやっている人がかなりいる。シリアスなことはやはり成績のことだ。友人のなかのまじめ人と成績のことについて話すことも時にはあるが、E高校は信頼しあえる友人のえられるところではない。信頼しあえる雰囲気ではない。相互に敵対しているのだから。先生に励まされたことはないし、父親もハッパをかけるだけだ」(O君)。O君の父親は、H工業高校の国語科の教師である。住居は、東根市東郷地区にあっ

て、周囲は水稻とタバコを栽培する農家に囲まれている。学校には汽車で通っているが、東根市の駅から相当離れているため通学には3時間以上かかる。冬期はかなりの積雪があるので山形市内に下宿する。「母親が公務員として働いていたため、息子は子どものころ祖母のもとにあづけられてきた。祖母のもとで就学前に大やけどをし、体のハンデを背負ってきた。授業場面では新鮮さを感じられず、退屈しているようだ。友人との関係では人を笑わせて気分をまぎらわせているようだ」父親はこう語っていた。

O君の事例から、E高校の生徒が大学進学を唯一の目的として、たがいに競争し合うなかで、主観の側にさらにそれを推進していく排他的な競争意識が形成されていることが知られよう。O君の「悩みなど話さない」「信頼し合える友人がいない」「人を笑わせて気分をまぎらわす」という態度も、進学校内での競争の一つの結果として理解することができよう。

O君の事例とは対照的に、仲間関係に支えられている公立不進学校の一生徒の事例を見よう。

〔O高校普通科Aコース K君のばあい〕

「中学時代から高卒後すぐに就職しなくてはならないと考えてきたから、工業高校を志望していた。けれども、工業高校では専門科目に集中することになるから数学が苦手な自分の学力では進学が無理だと考えて志望校を変えざるをえなかつ

た。O高校に入学することになって当初は大変ショックだった。同じ神町からO高校に通学している生徒は3人いるが、みな志望校を変えさせられて入学することになった生徒ばかりだ。他の中学校出身のO高校生と友だちになったことは、このショックを解消する上で決定的だった。ぼくの学校生活を支えてくれているのはなんといっても友だちだろう。クラス内部では10人位と親しくつき合っているし、所属している美術部でのタテのつながりも励みになっている。美術部での活動を土台としながら生徒会では文化部長をつとめている。教科の学習では生物や社会科に関心をもっている。現在の日本の状況を知ることができること、今自分が何をしなければならなかったかわかってくること、そんなことから社会科にはひきつけられる。ただ数学のように理解できない科目はおもしろくない。簡単な四則さえできれば社会では通用するのに、なぜ数学を学ばなければならないのか」以上のようにK君は語っていた。

母親は、「息子の父親は電気工事の作業中転落して死んでしまった。父親がいないため、息子は小さいころから近所の子どもにいじめられてきた。私は、家計を支えるため弱電関係の工場に勤務している。家庭の中で息子は私にだいい反発してきた。この子の大学進学には反対だ。大学に進学すれば、“暴力学生”になるかも知れない。大概の教師は息子をひねくれた子だと思ってきただろう。ただ一人だけ息子をよく理解してくれた教師があり、息子はその教師にたいへん励まされてきた。その教師も小さいとき父親を失った教師だった。高校を出て早く働くなかで苦勞をして親の気持ちがわかるようになって欲しい」と話していた。

K君は、家庭で1日約2時間学習し、料理や洗濯など家事全般にわたって母親の手伝いをしている。欠損家族というてんでも、進学をはじめとする諸基準にもとづく価値序列のなかでは学区内で最下位グループに位置づけられる高校の生徒であるというてんでも、K君は最も困難な条件のもとに生活している。その条件のなかで、K君は、かつての教師への敵対的感情や母親への反抗的態度を自らに内面化してきたのであろう。K君の就学するO高校では、同校普通科Tさんの事例(46～47頁)においてみたよう

に少なくない生徒が授業等における学習を拒絶し、守られるべき規範に背をむけている。しかし、K君のばあい、学校の威信の人びとによる貶価のなかで「逸脱」行動や学習意欲の喪失といった帰結に陥ることなく、学級や部活、そして生徒会活動によってえられた仲間集団に支えられながら、学校の生徒集団・仲間関係を決定的条件として活用することによって、規律ある学校生活と家族生活を築きつつある。教科の学習については、数学ぎりいという側面を残しながらも、普通科目への学習意欲を高めてきている。

以上にみた高校生の生活は、勉強・遊びの生活時間の学校毎における顕著な差、学校毎における仲間集団の組織化の傾向として要約される。それは、従来の教育社会学の幾多の成果の再現なのかもしれない。すなわち、以上の事実において実態として「学校ハイアラキーの否定的刻印」が明らかにされたわけである。にもかかわらず、その否定的刻印による帰結・軌跡としてのみ高校生の生活が描ききれわけではない。むしろ、学校差、選抜・競争の下におのの高校生の生活があることが、学校ハイアラキーの生活における否定的な体现——選抜・競争のなかでの「外的報酬の達成手段」としての学力の追求、そこからの排除の結果としての反抗・退行など——である高校生の生活を生み出している。同時に、それと対立しつつ同じ状況下に、この時代が能力を生徒たちみづからがひき出し、自我を成熟させる基盤をも生み出していることに対応して、高校生自身がみづからの生活を覆う否定的な傾向を認識し、青年期としての自我の形成と人間的な価値の学習に向かっていくことに意識的であるような生活態度(その典型例はなお少数であろう)もまた育まれつつある。そのこともまた無視しえない事実なのである。

二つの生徒の事例はこうした高校生の生活に豊富な選択肢のありうることを、限られた事例においてではあるが、示唆していた。ボッサードとボルは、青年期を「急速な成長をとげてい

るがまだ成熟には達していない」「成熟途上」の「人生の容易ならぬ段階」と規定し、青年が家族・仲間集団・大人の世界というたがいに対立しあう「三つの社会の中に生活」しなくてはならないこと、この三つの社会での生活に青年期の複雑な葛藤があらわされていることを指摘していた³³⁾。進学校の生徒の事例は、「大人の社会」も「家族」も競争的人生の勝利者となることを求め、選抜・競争的あり方を奨励する学校のなかに「仲間集団」さえもつことのできない生徒の姿を代表していた。この生徒のまわりには親や教師による青年の自立の方向とは対立する競争への同調を求める「保護」の網の目がはりめぐらされていた。しかして、この生徒の自立はかえって延期され、阻害されている、と見ることができよう。他方、公立不進学校の生徒の事例は、「大人の世界」も「家族」も競争的人生から排除されたこの生徒にその枠外での生活への同調を求めていることを示していた。そこにその同調への圧力（たとえば親・教師による）にいったんは反抗しながらも、その後就学している学校のなかにつくられた「仲間集団」の支持のもとに学校・家族内に自らの生活の規律を形成し、同時に教科の学習に励んでいる生徒の姿が示されていた。いずれの事例も選抜・競争と学校差の下でひきおこされがちな帰結への対応が基軸となり、それをとりおさえるうえで仲間集団の支持が決定的に重要であることを示唆していた。

(4) 教育をめぐる家族関係の葛藤

高校生の生活を家族との関係で私たちの調査資料によって検討するなら以下のようなだろう。

教育に関する両親の協力関係は、次のとおりであった。図12によれば、相当に多くの父親が日常的に子どもの教育に関して母親の相談相手となっている（父親の約76%）。そのかぎり、父親の多くが子どもの教育に参加している、とみることができよう。しかし、そのなかで積極的に子どもの教育について自らの考えを母親に対して示している父親は（図には示していない

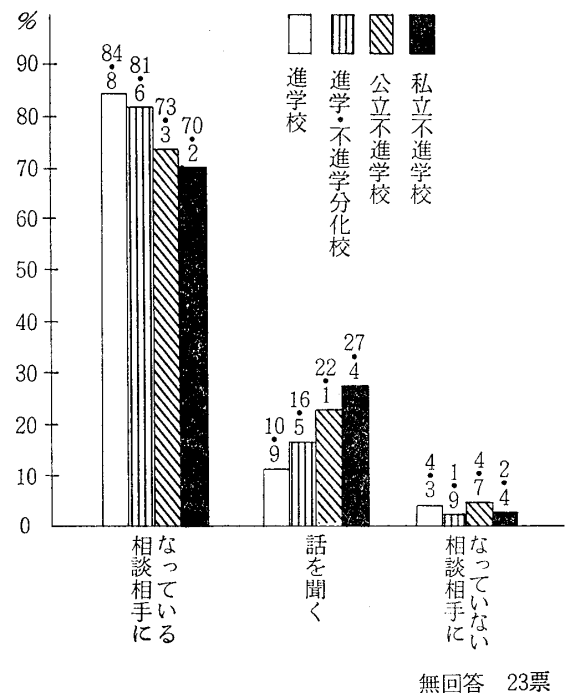


図12 子どもの教育に関する両親の協力
(父親の母親に対する協力)

が) 24%を占めるにすぎない。進学校と進学・不進学分化校に子どもを就学させている親のばあい、やや自らの考えを積極的に母親に示す父親が多く、不進学校でそのような父親がやや少ない。なかでも進学校の頂点にたつE高校の場合、91%の父親が日常的に毎親の相談相手となっている、との回答であった。

進学校の一生徒の事例を見よう。

〔E高校普通科文科系コース K君のばあい〕

K君の家族は、両親と私立大学に在籍する兄と本人との4人からなっている。父親は、県庁に勤務する地方公務員であり、母親は家事に専念している。母親はK君の学業成績をE高校で中程度と評価している。K君の父親は、K君の教育についてよく母親の相談にのってきた。むしろ、父親の方が積極的に子どもの教育の在り方に気を配り、K君が余りにはめをはずすときには厳しく注意してきた。K君は、E高校の友人たちとバンドを組んでおり、いま(3年生8月時点)も文化祭に向けてその練習に励んでいる。クラブがわりだから8月いっぱい練習させて欲しいと親に対して主張している。しかし、父親は、「子どもは自らの特性にしたがって伸びてゆけばよい」といいつつも、「ただ好きなものをやっていればよいという

ことにはならない。それでは進学にさしさわる。好きなことは目的を達してからでも遅くはない。いまは、いっさいほかのことはやめにして勉強せよといいたい。学歴社会のなかではよい学校に入った方が昇進するし、賃金も高いから得をする。いま必要なのは根性だ。大学に入って以降まで要求しないが、いまはがんばって欲しい」と語っていた。ところが、K君は、「3年生なので、もう少し学力を身につけなければ進学が容易でない」「勉強時間を思いどおり確保していない」と学力や進学について深刻な受けとめ方をしつつも、「じっさい忙しいけれどもやりたいことが沢山ある。何か一つのことをやりとげたい」という。彼は、仲間づき合いについても、E高校内だけでなく、ひろく同校外の友人をもっている。しかし親は、「はづかしい話だが、友だちづき合いがひろく、M農高の友人もいる」と語っていた。

K君の家族の事例は、両親によるK君の成績上昇に対する期待と本人のバンドへの熱意、仲間関係に求めるものとのギャップを明らかにしていた。進学校の生徒とその親という特殊な事例であるが、それだけに親子関係の葛藤を端的に示すものとなっている。さらにまた、夫婦双方で家族生活に、殊に子どもの教育に責任を負うという家族関係も示されている。少くとも、子どもの教育に関する限り、「父親不在」どころではないのである。しかも、競争にせり勝つための社会と学校の「業績主義」に家族が順応し、業績主義が家族に浸透するような形態で、夫婦の子どもに対する共同の責任をはたそうとする家族内の態勢がとられつつあることに注目する必要がある。

上の事例にかぎらず、子どもの教育における家族内部の協力は、親どおしの他の家族との共同・連帯に拡大することなく、むしろ逆に家族間の排他的な競争に連らなっていく。しかも、家族にまで浸透した「業績主義」は、社会化を遂行する単位が家族から学校へと移り、選抜をつうじて社会的地位の配分を行う機能に学校が覆われるなかでの「業績主義」にほかならない。その上、親の階層差、家族における教育環境の差を背後にもつ学校間格差のもとで、進学

校や進学・不進学分化校の不進学校に対する両親共同による子どもの教育に関する優位性となってそれがあらわされることになる。それゆえ、そうした業績主義は、本来の「業績」原理そのものではありえず、家族への否定的な業績主義の浸透であるといえよう。

高校生が家庭で担っている役割分担の現状を見るなら、次のようになる。ここでは、役割の分担を「家事手伝い」、「弟妹の世話」、「大工仕事」、「家業の手伝い」のおのおのについて検討する。事例数の制約から、図13には性・続柄・親の職業等の別に区分することができなかったが、それらの役割を担っている生徒の数は決して少ないものではなかった。しかし、進学校では家族内で担ってしかるべきそれらの役割をほとんど担わない生徒が多く、逆に不進学校ではそれらを担っている生徒が多い。進学校の生徒の家族が学校における選抜・競争を補い、家族が学校の生活に順応していることがここにも示されている、といえよう。進学校におけるそのような現状があるにもかかわらず、ぜんたいとしては少なくない生徒が家族内の役割を分担し、学校における（なかでも進学校における）選抜・競争と必ずしも適合しない家族生活がなお拡がりをもっている。

「夫は職場、妻は家庭（子育て）」といった夫婦の分業関係と対立する、子どもの教育における夫婦の協力関係も、高校生の家族内での役割分担も、高校生の人間形成をより現実的たらしめている学校を視野に収めるなら、そこに重要な制約が存在することが明らかとなった。それゆえ、そのような制約と家族のもつ他の制約がおりかさなることによって、家族生活場面で親にも子にも心理的葛藤が生まれざるをえない。ここでは、高校生の家族生活における悩みにしばってその心理的な葛藤の在り方をさぐってみる。

図14によれば、家族生活に悩みがあるという生徒は、進学校でその比重が低く、不進学校でその比重が高くなっている。悩みの内容からいえば、親子関係にかかわる悩みがもっとも多

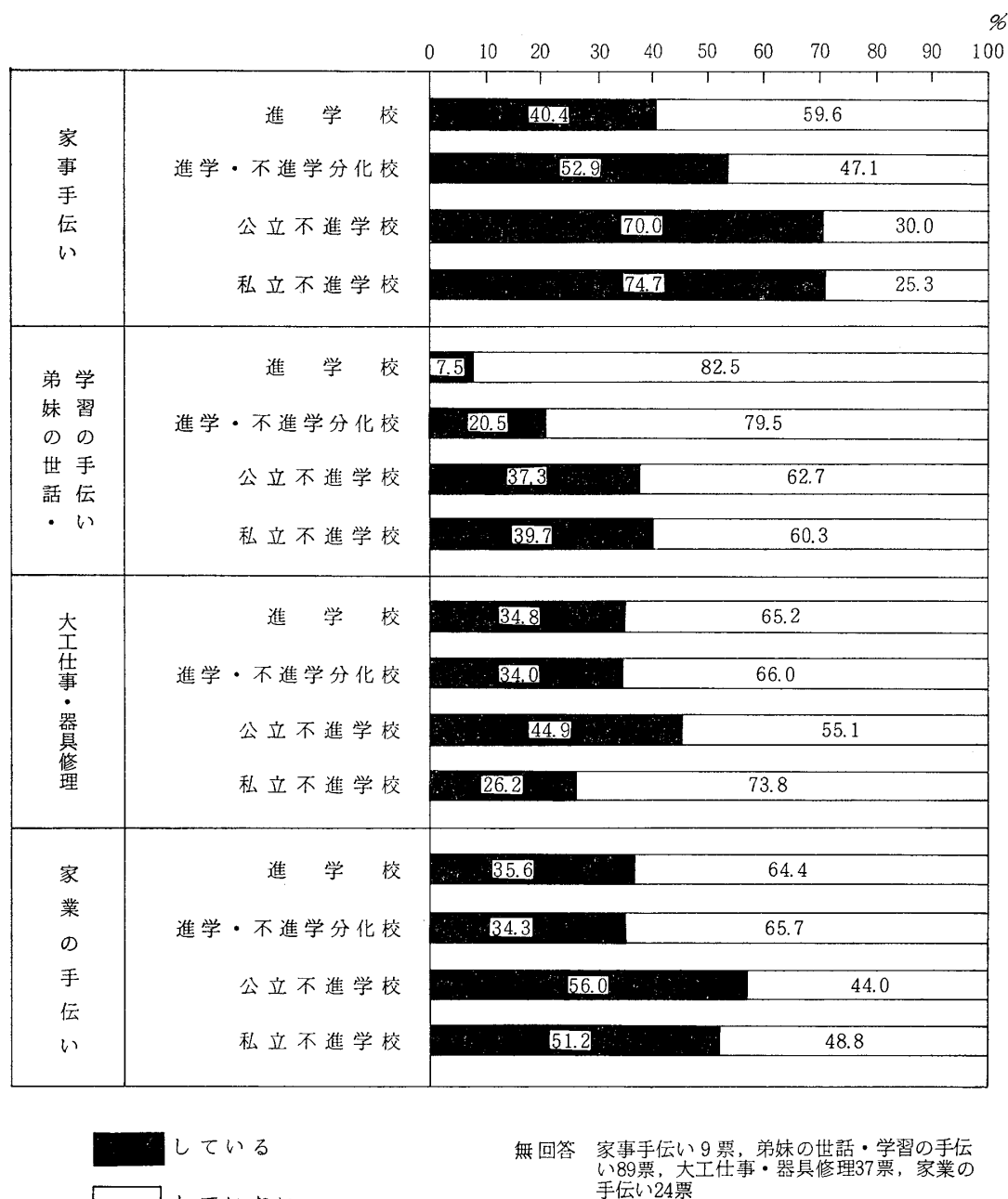


図13 家族内での手つだい

く、家族生活の将来に対する不安、家計への不安、家族の健康への不安がそれに続いている。しかも、生徒が家族生活に悩みを懐く場合、ただ一つの悩みだけでなく、いくつかの悩みが複合しあっている事例が少なくない。そのうえさらに家族生活に悩みをもつ生徒がやや集中するのが不進学校の生徒であり、かれらの悩みが複合し合うケースが多い。進学校のばあい家族生活に悩みをもたない生徒が圧倒的に多いのであ

るから、進学校に在学する生徒で家族生活に悩みをもつ少数派の生徒はいっそう困難の前に立たされている。

つぎに、家族生活における悩みと学習における不安との関係を検討しよう。表10によれば、家族生活に悩みをもつ生徒は、たしかに学習にも不安を懐いているケースが圧倒的に多い。逆に、家族生活に悩みのない、比較的恵まれた生活を送る生徒は相対的な意味で学習にも不安を

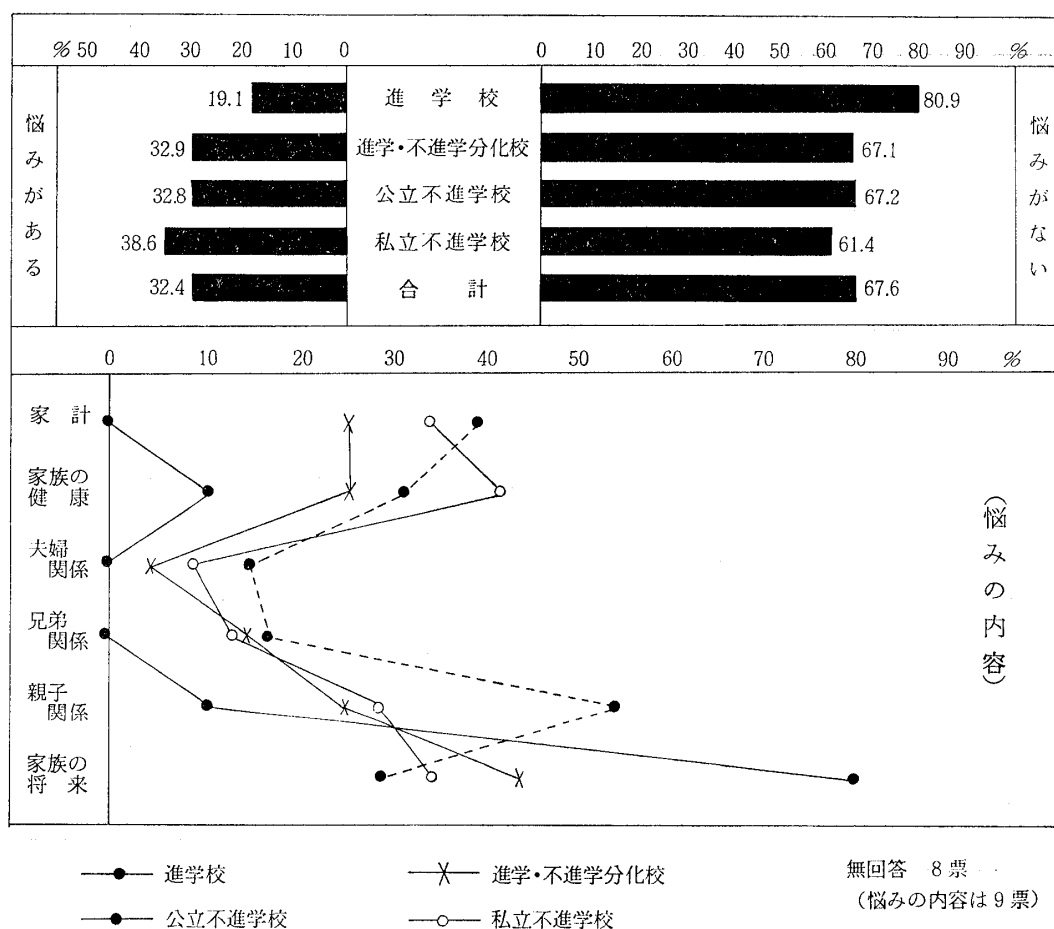


図14 家族生活における悩み、その内容

表10 家族生活における悩み×学習における不安

	進 学 校		進学・不進学分化校		公立不進学校		私立不進学校		合 計	
	学習不安あり	学習不安なし	学習不安あり	学習不安なし	学習不安あり	学習不安なし	学習不安あり	学習不安なし	学習不安あり	学習不安なし
家族生活の悩みあり	9 (100.0)	—	25 (92.6)	2 (7.4)	53 (91.4)	5 (8.6)	23 (71.9)	9 (28.1)	110 (87.3)	16 (12.7)
家族生活の悩みなし	34 (89.5)	4 (10.5)	43 (75.4)	14 (24.6)	80 (66.7)	40 (33.3)	28 (56.0)	22 (44.0)	185 (69.8)	80 (30.2)
合 計	43 (91.5)	4 (8.5)	68 (81.0)	16 (19.1)	133 (74.7)	45 (25.3)	51 (62.3)	31 (37.8)	295 (75.4)	96 (24.6)

注) 無回答36票。

() 内の数字は家族生活に悩みがある場合に同時に学習不安がある生徒と学習不安がない生徒の合計を100%としたときの%である。家族生活に悩みがない場合も同様である。

懐くことのない生徒である場合が多少多いといえることができる。しかし、学習上の不安は、ある意味において家族生活のあり方を超えている。なによりも、進学校—進学・不進学分化校—公立不進学校—私立不進学校の順で進学校に

は学習上の不安を懐く生徒が多く、不進学校では学習上の不安を持たない生徒が多いことがそれを示唆している。それゆえ、学習における不安は、家族生活を覆い、家族生活を超えながら、家族の状態に深刻な影響力を行使してい

る、といえよう。

進学校に就学しながら、家族生活の悩みと学習の不安とのなかに動揺せざるをえない生徒の事例を紹介しよう。

〔W高校国立大学文系コース Oさんのばあい〕

Oさんは、4人兄弟の末子である。両親ともに農業に従事しているが、農業経営の規模は水稲が30a、果樹(桃、リンゴ、黄桃)50aである。経営規模が小さいにもかかわらず、父親に神経痛の持病があってなかなか兼業に働きに出ることができない。それでも季節的に(2月、3月、11月)新威の経営する建設会社に働きに出ている。しかし、父親に持病があるため農作業が母親の肩にかかっている。果樹と稲作を営んでいるから田植のころから稲刈りのころまで農作業がきれめなく続き、父親も母親も通年の兼業に従事することができない。だから、家計がなかなか苦しい。Oさんの母親は後妻であり、年上の兄姉3人は異母兄弟である。彼女は、こうした家族構成のなかに生活している。

担任の教師は、Oさんを自分の生き方をもっていてかなり自意識の強い生徒、そして友人の少ない生徒としてとらえている。教師によれば、Oさんの成績は学校のなかで中の上くらいである、という。しかし Oさん自身の自己評価によれば学業成績は科目にかたよりがあり、下であるという。家庭での学習時間は、1日2～3時間であり、W高校の生徒としては学習時間の多い方ではない。「現在、音楽部に所属している。3年生だけれども、11月までは部活を続けるつもりである。なによりも自分の進路や成績のことで一番悩んでいる。各教科の学習と部活動が両立できない時があるが、そういう時大変不安になってくる。授業は、受験向けに傾斜していて関心をひきつけるものになっていない」とOさんはいっていた。Oさんは、学校生活についても、家族生活についてもあまり多くを語らないが、母親は「本人が進みたいといっているから希望をかなえさせてやりたい。娘は、国立大学教育学部志望だ。本人は決して勉強が嫌いではないが、努力がたりないと思う」といっていた。

Oさんは、「家族生活には特に悩んでいない」というが、家計上の困難、父親の健康、兄姉がみ

な異母兄弟であることなど、悩みや心配ごとの材料は少なくない。進学校の他の生徒の親にくらべれば、Oさんの両親の教育熱は余り高いとはいえない。Oさんの大学進学についても、兄姉たちが高卒後進学せずに働いているから、母親は「気兼ねがないといえようそになる」と語っていた。学習や進学が本人まかせであることのなかに、家計、健康、後妻、異母兄弟といった条件がすべて含意されているのである。

以上のすべて(すなわち家族のなかでの高校生の生活)を要約するなら、一方では、進学校の生徒の多数が子どものための両親による「対等の立場での協力」に恵まれ、家計や家族の健康、親子関係といった悩みをほとんど持たないのであり、他方では、不進学校の生徒の少ない部分が両親の協力と自らに対する親の援助に恵まれず、家族生活の在り方について心配事・悩みをかかえている、ということができよう。しかも、高校生の多数派は、親どおしの協力のもとにあり、家族生活について特に悩みを持たない生徒たちである。そのような進学校の生徒と多数派の生徒は、やや視野をひろげていうなら、現代に支配的な夫婦家族の文化的パターンを示す<友愛家族>という性格をもった、そのような家族のなかに生活をしている、ということができる³⁴⁾。

そうした家族は、直系家族の文化的パターンを示す<家父長制家族>が解体し、高度経済成長の影響が生活のなかに深く浸透した時代の産物であった。家族の形態や文化が大幅に変わるなら、子どもの教育における家族の機能も著しく変化しないわけにはいかない。生産が生活と一体的にいとなまれたかつての家族においては、子どもの社会化の目標も家業の継承をはじめとする家への同化にあった。ところが、子どもの社会化の目標が家を離れるなら、親は新たな意識をもって、(家族内部のみで決定することのできない)子どもたちの将来に強い関心をもち、子どもの将来の地位の安定のために学校が十分にその役割を発揮するよう期待をよせるところとなる。親は、子どもを自立的な社会人・職業の担い手に成長させることに積極的な

る。さらに、夫婦関係の民主化にともなって父親も家族役割に参加するようになる。高校生である我が子の教育への父親と母親の協力もそうした動向の一端をなしているといえよう³⁵⁾。

しかし、進学校と不進学校の生徒の家族生活にある夫婦の協力体制の格差、家族の生活文化における差、家族生活の悩みが不進学校の生徒に集中する実態、そして不安定な家族で生活する進学校の少数派生徒の悩みは、それじたい、肥大化した選抜を遂行する高校の能力主義が本来的にもつ基盤をあらわしている。子どもの教育における両親の協力態勢を十分に子どものために保障することのできる家族とそれをなさない家族とのあいだにはなお深い溝が横たわっている。

同時に、ここでより一層重要であるのは、肥大化した高校の人材選抜と配分の機能が、その背後にひかえる競争社会の力とあいまって、親をして家族を学校と社会の「代理機関」とさせていることであろう³⁶⁾。「夫婦の合意と協力」も、親どおしでとり結ばれるはずの地域的結合の切断も、みな肥大化した人材選抜機能のなかに呑み込まれた家族の姿をあらわしていた。家族生活の悩みと複合する学習不安は選抜・競争から排除される方向での代表例を、教育熱にあふれた親が高校生である子どもにかえって自立を阻害する方向で働きかけを行っている例は学校による選抜の下請を示す代表例をあらわしていたのである。そうした親子関係や夫婦関係は、いずれも歪められた文化的パターンとしての〈友愛家族〉を示している、といえよう。

＜註＞

30) 田代三良『高校生の生活』大月書店、1979年、73～74頁。

31) 高校生の学校生活について私たちは以上のように述べてきたのであるが、高校生の学校生活にかんする教育社会学の研究動向についてここでひとこと述べさせていただきたい。こんにちにおける教育社会学の主流は、社会から学校へのインプット（生徒の成績水準、学校差、地域的特性など）、学校から社会へのアウトプット（進路、人材配分

など）だけでなく、それらを媒介する学校の内部過程（スループット）の分析に関心を集中している。インプットやアウトプットの要因以上にミクロな「学校そのもの」の過程で内部要因によって生じる「生徒文化」の分化と選抜過程を「組織論」や「経営論」を用いて分析することをつうじて、学校の地位表示機能と選抜機能をより精緻にとらえ、それらの要因を分析しようとしている。学校の内部過程の分析は、選抜機能や生徒の生活様式を捉えるという課題にかぎっても、必要な研究課題となっている。しかし、人材選抜の機能も時代や社会に応じての段階性や類型性をもつし、また選抜機能や生徒の生活の分化だけが学校の機能のもたらすものではない。この稿において「学校間格差下の高校生の生活」を検討したのは、パースペクティブの上でも、方法論の上でも「スループット」の分析とはいくぶん異なっている。本学紀要第16集の13～14頁で私たちは生徒の状態の分析が教育実践分析の出発点である、と述べた。すなわち、第一に、高校生の生活に対する肥大化した人材選抜機能と学校差・分化の否定的な刻印を、第二に、社会変動の過程で「商品としての学力」追求、「有利な社会的地位」志向が否定的なすがたで実現するまさにそのただなかで青年が自我成熟をとげ、人間的価値を学び、それらを獲得していくことが可能とされる基盤を問う、という課題を設定した。そうした課題のなかで、殊にこの節では選抜・学校差の下での生徒の学校生活への否定的刻印を示し、その下で制約を受けた学校生活を実態として示すことに重点をおいて検討をおこなってきたのである。学校内部の分析の重要性を認識しつつ、内部へとつらぬきとおす構造をあきらかにすること、青年期の発達にとって、選抜や生活の分化にかぎらず、矛盾と葛藤のなかにある学校の社会的諸機能の総体としての動態がもつ意義をあきらかにすることが必要とされる。以上のように私たちは考えるのである。

32) 松原治郎・久富善之編著『学習社会の成立と教育の再編』東京大学出版会、1983年、96～97頁（住田正樹の執筆部分）。そこで、住田は、「子どもの発達過程に伴う生活構造の変化とは、（中略）年齢段階による系統的変化ではなく、教育制度としての学校段階による跛行的変化なのである」といっている。重要な指摘である。

33) J. H. S. Bossard and E. S. Boll, The Sociology of

- Child Development, 19, Harper & Row, 1965, pp. 467-469. 末吉梯次監訳『発達社会学』黎明書房, 1971年, 493~494頁。
- 34) E. W. Burgess and H. J. Locke, Family, 1950, American Boock Company, pp. 483-753. ここにアメリカの家族がコンフリクトをともしつつ夫婦の共同責任にもとづく家族へと変貌する姿が生々と描写されている。
- 35) 父親の家族役割への参加が主要な動向であるとの説をとっているのは, 春日キスヨ「現代家族と社会化機能」『現代社会における地域と教育』東洋館出版社, 1981年, 67~68頁である。
- 36) 山手 茂「現代家族における人間形成」麻生誠・柴野昌山編『変革期の人間形成』アカデミア出版会, 1978年, 105~108頁。

Students' lives and Curricula under Differences among Senior High Schools (2)

—A Research in Murayama District Yamagata Prefecture—

Satoshi YOKOYAMA

In Bulletin of Sendai College No.16 we insist that the subject of the analysis of students' lives is, first of all, is to examine the negative influence of differences among senior high schools. Secondly, we insist that the way of using the time of lives and the state of social relations among senior high school students may contribute to standing on their own legs.

We analyse the following points in this article.

1. Differences of students' lives in school and these bounds.
2. Ways of using the times and peer groups of senior high school students.
3. Conflicts of family relation related to education.

The conclusion from the above study is following:

First, differences among senior high schools have decisive influence on not only students' lives in schools but also on their lives outside of schools. Secondly, not a few students develop their ego and learn human values through their lives and conflicts as they become adolescent.

It can be said that modern senior high school students live a life in their serious conflicts.